

学業不振から不登校となった生徒の事例

1. はじめに

今回の事例は、学業不振が原因で不登校になった高校1年男子A男が、各担当教師の協力的な指導援助によって、学校に適應していったケースです。

2. 問題の概要

A男は高校入試の成績は比較的上位で入学してきた。また、自分の得意とする運動部に入部し、意欲的に練習していた。

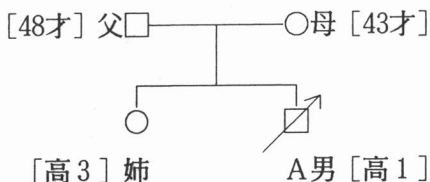
しかし、6月に入り、上級生とのトラブルから部活動をやめ、同時に学校生活に対する意欲も薄れてきたように見られた。7月の期末考査の結果では、成績は大きく後退した。不良交友も始まっていた。

2学期になり、頭痛・腹痛・気分不快などを訴えて休むことが多くなった。「学校がおもしろくない」という訴えも聴かれるようになり、徐々に怠学傾向が強まった。

担任のK先生の精力的なかかわりにもかかわらず一進一退を続けていたが、10月になり、全く登校しない状態になった。そして、「退学して働きたい」と言いだした。

3. A男に関する資料

(1) 家庭環境



- ・父は厳格で、母は過干渉的。
- ・姉は進学校に在籍し大学進学を目指して

いる。

- ・5年前に父が事業に失敗し、多額の借金を抱えた。一時期は苦しい生活が続いたが、現在は立ち直っている。

(2) 成育歴

以前は、A男も成績優秀でスポーツ少年団で活躍するなど、快活な子供だった。父も長男ということでかわいがっていた。

しかし、父が事業に失敗した時を契機に不良交友が始まった。特に中学1・2年生の頃には怠学傾向も強まり、シンナー吸引で補導されることもあった。

それでも、中学3年生になると高校進学を意識するようになり、学校中心の生活に戻っていった。A男は普通高校への進学を希望したが、基礎学力不足のため、やむをえず実業高校へ進学することになった。

(3) 性格

小さいころから神経質な子供で、きちんとしないと気がすまないところがあった。きちょうめんで、完全癖が強い。

4. 指導援助の実際

[指導援助の方針]

- ① A男に学校生活を続ける意欲を持たせる指導を優先する。
- ② 担任のK先生がA男、教育相談係のM先生がA男の両親を担当し、生徒指導部主任のO先生が学校全体の連絡調整役を受け持つように役割分担する。
- ③ 1学期の後半以降、A男の心境にどん